

それが

俺らの

五月五日



Vol. 7

目次

もっと面白いストーリーを。

2年 款空

猫依存症のおんなのこの話

2年 ねお

腕時計

2年 信哉

昼休み

2年 鴛鴦モナカ

鬼灯提灯

2年 赤琴かなで

Everyday with Magic school

2年 雪丸奈々瀬

『 』

2年 律娘

アレグロ・アレゴリー

2年 四四九

さよなら思い出 Where did come the letter from ?

3年 碧星

もっと面白いストーリーを。

いろんな人と、imageの共有。
ワタシノコトバを楽しんでもらおう。

説明がうまくなりたい。

もしくは、誰かの心を動かすような何か、
見知らぬ人の記憶にまでさりげなく残る何かをしたい。

作者ってどんな気持ちでかいているんだろう。

初めてだって遠慮は無用。
私たち文芸部はあなた方の独創性を必要としています。

活動は、

詩

俳句

短歌

童謡

小唄

評論

小説

脚本

純文学

ポエム

私小説

携帯小説

2次創作

ライトノベル

フィクション

ドキュメンタリー

など

その他思いついたら教えに来いや～！

本が好きなコおいで！
漫画が好きなコおいで！
映画が好きなコおいで！
俳句を作りたいコおいで！
歌詞を作りたいコおいで！

原稿用紙が好きなコおいで～
ルーズリーフが好きなコおいで～

比喩が好きなコおいで！
擬人法が好きなコおいで！
体言止めが好きなコおいで！
ㄱ！倒置法が好きなコおいで！
（そうだね。マイナーだね。）

孤独に罹ったそのときおいで！
青春に疲れた日にもおいで！
不満なんかもかかえておいで！
コスー（ゲッ！）好きなら迷わずに！
妄想好きなコぜひココへ
いやほんと、リアルこれなんで←

木曜日しかあいてないような忙しいコでもどンドンおいで！
平日にあまり予定がないコも全然ないコももちろんおいで！
作品提出きっちりやってりゃ部活はほとんど来なくてOK！
又、作品まったく出せなくても部活にそこそこ来れたらOK！
1ヶ月、使えるお金が50円あれば入れるぜ！
別に2ヶ月一括で、100円だしてもかまわんぜ！

文芸部へ！！
(倒置法……マイはにいー！)

部室

3号館4階講義室E

活動

ほぼ毎週木曜日と、たまに月曜日とか火曜日

猫依存症のおんなのこの話

夜、いつもの道を通ると

猫が一匹います。

白い、綺麗な猫。

私は、「猫、猫。」と呼び掛けます。

猫は私に答えてくれるように

「にゃあ。」と鳴きます。

私は援助交際をしています。

知らない男の人の下で、「にゃあ。」と鳴きます。

私は猫にそのことを話しました。

私が「にゃあ。」と鳴いた日は、いつも猫にそのことを話しました。

猫は一言二言、相槌を打ちつつ、静かにその話を聞いてくれました。

けれども私は、あまりいい気分はしませんでした。

綺麗な白い猫を、汚しているような気がして。

ある日、猫はいつもの場所に居ませんでした。

次の日も、その次の日も。

「猫、猫。」

私は呼び掛けます。

けれども猫は、答えてくれません。

頭がおかしくなりそうで、次の日から、私はもっと沢山の男の人の下で、「にゃあ。」と鳴きました。

そうして、幾日かが経った時、いつもの道を通り掛かりました。

すると、あの声が、愛おしいあの声が聞こえました。

「にゃあ。」

けれども私が見た猫は、真っ黒い、綺麗な猫でした。

「猫、どうしたの。」

私は尋ねました。

猫は、たくさん話しました。

猫は私の真似をして、沢山の雄猫の下で、「にゃあ。」と鳴いたらしいのです。

「あなたのように、綺麗になりたかったの。」

「でも、猫。私は綺麗じゃないわ。汚れているの。猫、あなた前の白のほうがよく綺麗だったわ。」

「でもあなた、汚れていても、綺麗なもの。」

「いいえ、猫。だからと云って、あなたは私のようになってはいけないのよ。」

「でも、もう真っ黒いわ。元には戻れないわ。」

猫は嬉しそうに話しました。

「これで、私とあなた、一緒よ。」

猫、愛おしい猫。

どうしてそんなことを云ってくれるの。

私の両目から、沢山の涙が溢れました。

心の汚いものが、洗われていくように、たくさん、たくさん、溢れました。

猫は微笑みながら云ってくれました。

「今のあなた、とてもとても綺麗だわ。」



【じゃ、また明日、11時に駅でね。】

僕はそのメールを見てから、布団に入って目を閉じた。

翌日、朝。

いつもより少し早く目覚めた。体がいつもより軽く感じる。早々と朝食を済ませて、顔を洗ったり着替えたりして、彼女と会う準備をした。

僕と彼女は別に付き合っているわけではない。僕の一方的な片思いだ。

彼女と出逢ったのは、約3ヶ月ほど前。友達の友達つながりで知り合い、そこからはみんながよく出かけることがあった。

しかし、今日ばかりはいつもと違った。

今日は、彼女と僕、二人きりなのだ。

僕はいつもの腕時計をしてから、時間に余裕を持って家を出た。

自身の足取りがいつもより早いのがよくわかった。早く彼女に会いたかったのだ。

駅に到着して、いつもはみんなと待ち合わせるベンチに座った。腕時計を見ると、もうそれは約束の時間だった。余裕を持って家を出たはずだったが、それでもなかったのかと思う。

しかしそんなことは、あまりにどうでもいいことだった。彼女が約束の時間になっても、来ないのである。

彼女に一度電話を入れた。しかし彼女はでない。彼女が待ち合わせに遅れるなど、まず、普段ではありえないことなのだ。不審に思った僕はあたりをうろうろとして、次第に軽いパニックになる。事故にでもあったのだろうか？ 風邪をひいたのだろうか。とにかく連絡がないことが心配だった。

僕は駅を後にして、走り出した。彼女を探すために。

不安な気持ちは、ただ膨らむばかりだった。

秋の、すこしひんやりとした風が僕の頬をかすめる。紅葉の絨毯の上を僕は走る。何度か転びそ

うになった。

彼女の声が早く聞きたかった。あの笑顔が見たかった。この気持ちを早くどうにかしたかった。

見慣れた街並みが、ぐんぐんと僕の後ろへと駆けていく。その中に彼女の影はない。

何十分も走った気がする。しかし一度も、彼女らしい人物を見ることはなかった。

仕方がないので、駅に戻ることにした。最後の望み、彼女がただ遅れてきたことを願って。

僕は駅に来て、いつものベンチの前で立ち止まる。

ベンチには、秋色の中に一つだけ、白い色がちょこんと座っていた。

彼女がいた。

「あ、きたきた。」

こちらに気付いた彼女がこちらに近づいてくる。僕は啞然とした。まるで、何事もなかったかのように微笑む彼女の顔を見て。

「君が時間に来ないなんて珍しいと思って、探してたんだ。」

僕が息を整えてからそう言うと、彼女はきょとんとした。

「なに言ってるの？ 11時って……言ったよね？」

僕は頷いた。すると彼女は自身の携帯を開いて、僕の顔の前に突きつける。そこに表示された時間は、11時を5分すぎただけであった。

「え、あ、あれ？」

僕は何十分も走った気がしていた。なのに、11時から5分ほどしか経っていなかった。これはいったいどういうことか。

僕はまさかと思って、自分の腕時計を見る。

「……ああ。」

———なんだ、そうか。

僕の時計は、ちょうど11時をさして止まっていた。どうやら、ここに来た時点ですでに時計は止まっていたらしい。つまり僕がここに着いたのはもっと早い時間。家を出たのも早かった上、気持ちの高まりのあまり早足で歩いてきていたため、やはり余裕を持ってここに着いていたのだ

。

ただの、僕の早とちりだったらしい。

僕は安心して、気が抜けて、ベンチに倒れこむようにして座った。

「もー、遅いよ？」

彼女はくすりと笑った。

「走って急いできてくれて、ありがとう。」

ホントは、それで走っていたわけではないけれど。

「そうそう、さっきの電話ってなんだったの？」

彼女が僕に聞いてきた。

「.....遅刻するっていう予告をしようと思ってさ。」

僕がそう言うと、彼女はもう一度笑った。

昼休み

「波乱だわ！！」

いつものように親友の愛美(めぐみ)と2人でお弁当を食べ始めた時、愛美はいきなり叫んだ。

「ごめん、意味が理解できない」

「もう、紗代(さよ)はわかってないな。そんなんじゃ食パンくわえて曲がり角曲がったってイケメンとは出会えないぞ！」

「いつの時代だよ……」

「出会いに時代は関係ないのよ！本当、あのシチュエーションを考えた人こそが神だと思うわ……」

そんなんだから愛美は彼氏ができないんじゃないのか、と思ったが口には出さないでおいた。

「で、波乱って？ ついに好きな人でも出来たの？」

「とうとう主人公の恋敵が判明したの！！」

すでに会話がかみ合っていない。しかもやっぱり漫画の話だった。

「それって愛美が今ハマってる漫画？」

私が聞くと、愛美は一瞬ニヤリと笑った。

帰りたくなった。

「これよ！！」

と愛美が出したのはいかにも純愛そうな表紙の少女漫画だった。

どうやら、題名は【女子恋】というらしい。ベタというか何というか……正直あまり面白くなさそう。

「へー。ちなみに恋敵ってどんな女の子？」

「親が勝手に決めた許婚。しかも同じクラスなの！」

題名だけじゃなく内容もベタらしい。

「でもね、男の子はその許婚のお世話係に恋して、それを知った許婚は何も知らないお世話係を執事に殺させて、執事が許婚の身代わりで捕まって……」

「昼ドラじゃねえか！！！」

柄にもなく叫んでしまった。

「何が【女子恋】だよ！ もはや嫉妬と憎悪にまみれたただの昼ドラだよ！」

題名と内容が全然合っていない。むしろ真逆。

少女漫画というジャンルに分類されていい内容なのだろうか。

「ね、紗代も読んでみなよ！ 絶対ハマるからさ！！」

「断る」

即答。

「……………ねえねえ、さーよちゃん」

気持ちが悪いです愛美さん。

つんつんしないでください。

「主人公の女の子、佐倉さんっていうんだけど、どうしてるのか気にならない？ 気になるよね？」

まあ、さっきから全然話に出てこないから、ちょっと気になってはいたけど。

「しょうがないなー。どうしてもって言うなら教えてあげてもいいけどなー」

殴った。

「痛い……。でも愛美負けない！ だって女の子だもん！！」

この子本当は何歳なんだろう。

「説明しよう！！」

愛美の独り芝居が始まった。

『あの人を殺したのは執事じゃない！！ 許婚よ！！』

『は？お前何言ってんだよ！！ そんなはずないだろ！！』

『許婚が殺すように命令したの！！ あなたの気持ちに気付いていたから！！』

『嘘だ！！ お前こそ、俺が好きだからってそんな嘘つくなんて最低だ！！』

『え……。なん、で……』

『アイツから全部聞いてるんだよ！！ 俺とアイツの婚約を阻止しようとしてそんな嘘ついてるんだろ！！』

『違う！！ 嘘なんかじゃない！！』

『俺はお前みたいな最低なやつのことなんて信じない！！ もう俺にかかわるな！！』

『そん、な……。待って、待ってよ！！』

「ねえ紗代ちゃん」

「ん？」

「愛美ちゃんどうかしたの？」

「え、あ、その、な、なんで？」

「いや、頭おかしくなっちゃったのかなって」

「……………」

愛美さん、クラスの女子が引いてるよ。むしろ轢きたいと思ってるよ。

でも、そんなことも知らずに愛美の独り芝居は続く。

『あら佐倉さん、どうして泣いているの？ 失恋でもしたの？』

『あんたのせいで……』

『ああ。あの子はしょうがないわ。邪魔だったんだもの』

『そうまでして結婚したいなんて、最低よ！』

『最低なやつ、に最低なんて言われたくないわ』

『くっ……』

『あなたの負けよ。あなたが彼と結ばれることはもうなくなったの。でも心配しないで。結婚式には呼んであげてもいいわ』

『ばかにしないで！！』

『ふふふ。そんな怖い顔したら綺麗な顔が台無しよ』

『殺してやる……いつか絶対殺してやる！！』

「かくして、ここから佐倉さんの復讐物語が幕をあけたのである！！」

「ふーん」

「え、それだけ！？ これだけの物語を聞いて感想はそれだけなの？」

「それだけって、じゃあ他に何言えればいいの？」

「佐倉さんの気持ちわかるなーとか」

「わかるか！！ あんな壮絶な女の争いを繰り広げている女子高生の気持ちなんてわかってたまるか！！」

何で私がこんなに叫ばなきゃいけないのだろうか。

周りを見ても誰も私と目を合わせてくれない。

私と愛美を同じ目で見るのはやめていただきたい。

はあ。

ため息が出た。

「で、佐倉さんの復讐物語はどうなったの？」

「え？ 漫画はここで完結だけど」

「はあああああ！？」

何で？

さっき「佐倉さんの復讐物語が幕をあけたのである！！」って言ったじゃん！

「少年漫画によくあるでしょ？ こういう終わり方。《俺達の冒険はまだまだ続くぜ！》みたいな」

殴った。

「お前、そんなドロドロで生々しい正直少女漫画とも思えない昼ドラ漫画と少年達のバイブルを一緒にしていいと思ってんの!？」

「さっきより痛い……。私を殴ったって終わり方変わるわけじゃないのに……」

「ここにきて正論言ってるじゃねーよ！ おかしいと思ったんだ、愛美の独り芝居が変なところで終わるから！」

「芝居って、そんな安っぽいものと一緒にしないでよ。私のは舞台だよ舞台」

必殺、片目潰し（右目）!!!

「うぎゃあああああ!!!」

どうして両目じゃないのかという質問にはお答えできません。

「目が……私のぷりちいおめめが……」

ぷりちいおめめって。

「もういいわ……。どれだけ説明しても紗代には【女子恋】の素晴らしさがわかってもらえないのね」

「だって素晴らしくないし」

「見てなさい！ 明日こそは絶対【女子恋】の世界に沈めてあげるから!!!」

「そんなことしたらお前を地面に沈めてやる」

「紗代がコワイ……」

ふと、時計を見ると昼休みが終わる5分前になっていた。

長い昼休みだったなー。

「ほら、もう昼休みも終わるし、左目も潰されなくなったら【女子恋】片付けてよ」

「あのさ、紗代のキャラが変わってきてる気がするんだけど」

必殺、片目潰し（左目）!!!

「うぎゃあああああ!!!」

そういうことを言ってはいけません。

「ま、片目より両目の方がバランス取れていいか」

「何のバランス!？」

お、愛美初めてのツッコミだ。
デビューおめでとうございます。

「こんなに無意味な昼休みを過ごしたのは初めてだよ」

「無意味なんかじゃないわ！！」

「愛美なんて両目潰されて終わったよね。何やってんのバカじゃないのいやバカだろ」

「やったのは紗代じゃない……。いつか絶対仕返ししてやる！！」

かくして、ここから愛美さんの復讐物語が幕をあけたのである！！

「ここで完結だよね、愛美さん？」

「紗代のばかあああああ！！！」

燃えるような夕陽が校内に差し込む。

まるで鮮血のようだった。

「コガネ、早く帰ろう」

「おう、ちょっと待ってくれ」

コガネと呼ばれた青年は鞆を持ってこちらに駆けてきた。髪が夕陽で金色に輝いている。

「十兵衛、今日は寄りたいところがあるんだが」

教室を出て廊下を歩きながら話す。十兵衛と呼ばれた青年は快く承諾した。

二人はとある高校に通う親友同士。平平凡凡の日常を送っていた。

そして今日もただ下校し、帰宅して明日になる……そのはずだった。

下足室を通り過ぎ、正面玄関を開ける。

ガタッ。

しかし扉は開いてくれなかった。もう一度試してみるが、どうやっても開かない。

「コガネ、これどうなって……」

十兵衛が疑問に思って確認した時だった。

背後でパンと破裂音が響き、頬が熱気を帯びる。

火薬の匂いがして、赤い線の傷を頬に残した。

「……なにこれ」

言葉に詰まる。背筋が凍って動けない十兵衛の頭に何かか押し当てられた。

リロードする音がそれから聞こえる。

「えーと、この時間のお前は十兵衛って呼ばれているんだっけな」

耳にしっかりと浸透していく、低い男の声。

空気が冷える。夕陽が照らしているというのに、この空間は陽のぬくもりだけを遮断したようだった。

背後の者が、ゆっくりと言葉を綴り出す。

戦慄を持って。

「十兵衛。お前を殺しにきた」

恐怖が一気に思考を奪い去った時、十兵衛は振り返って頭に当てられているものをはたいていた。

ズガンと一発、銃口がずれて足元に着弾する。

「……ひ」

火縄銃だった。

先ほどは自己防衛本能が理性を上回ったが、今度ばかりはそうはいかない。

「(逃げなきゃ、殺される)」

絡まる足を無理矢理立たせ、力の限り廊下を走る。

後ろから伝わる怨念の殺意。ずっと受けていると気が狂いそうだ。

「なに、どうな、って……うわああ!？」

気付いたら廊下がなくなっていて、虚無が広がっていた。

そこに足を踏み外す。体は重力に従順で、下へ下へとあっという間に落ちていった。

水の流れる音がする。

ぼんやりとした頭は近くに水場があることを先にはじき出した。

「いったた……頭が痛い」

何とか起き上がって辺りを見渡す。

十兵衛は雑草が茂る川辺にいた。それに空も明るく、時間は昼過ぎくらいだろうか。

「僕は、コガネと夕方の学校にいたはず……。そうだ、コガネは!？」

学校にいた時にはその姿を確認できなかった。

さっきの男はまさかコガネにも危害を加えるのではないかと心配になってくる。

と、その時上流の方からばしゃばしゃと水飛沫を上げる音がした。

それが大げさに聞こえるものだから、何か大きなものが川に落ちたのかもしれない。

腰を上げてそちらの方に近づく。

「うわっ」

前方から走ってきた何かが十兵衛にぶつかった。

「ふにゃ! ぐ、ぐ」

何かは狐だった。

それも首にウナギを巻きつけた、泥だらけの子狐。

狐は十兵衛にぶつかって尻もちをついていたが、素早く立ちあがって横っ跳びで走っていく。

「なんで、こんな街中に狐? しかも、どこかで見たことあるような」

「くそお、またごんにやられたか」

がさがさと草を掻き分けて来る一人の男。

何だか過去の村人のような格好で、川に入っていたらしくずぶ濡れで泥が付着していた。

その男と十兵衛の目があつた瞬間、強烈な頭痛がして思わず目を閉じる。

再び目を開けた時、十兵衛は学校の教室にいた。

「……え」

窓から伸びてくる夕焼けの眩しさに目が眩む。

自分の身に何が起きているのか、これが現実か夢かの区別すらつかなくなってくる。

「さっきのは、夢? にしてはリアルだったなあ」

特に狐にぶつかられた時はちょっと痛かったし、手には草の感触が残っていた。

どうにも夢と決め付けるのは早い気がする。

「(そういえば狐のこと、ごんって呼んでた。それって『ごんぎつね』のことかも)」
日本にある一つの昔話である。

ごんという狐が償いのために兵十という男に品を持っていったが、最後には撃たれてしまう話だ。

確か小学生の頃に教科書に載っていた、誰でも知っている有名な物語。

「……確かめてみよう、図書室に行けばあるはずだし」

それにはまず、ここがどの教室か把握しなければならない。廊下に出てクラスを確認する。
3-1と簡素に書かれていた。図書室は一つ下の突き当たりである。

「(コガネ、無事かな)」

安否は気になるがもう一度正面玄関に戻るのも嫌だった。

今は生きていることを願うのみである。

階段を下り、廊下の左右を見渡した。

「……灯り？」

ちょうど左側に視線を向けた時だ、廊下がゆらゆらとまどろむ青い灯りが浮いている。

否、それは提灯の灯りだった。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ……ってか。そう急がなくてしっかり撃ち抜いてやるよ」

カチャカチャ鳴るのはあの火縄銃。肩に担いでゆったりとこちらに歩いてくる。

真っ白な髪の方で、神子のような神聖な服装。自分の命を狙う者には似つかない。

図書室は自分の後ろであるから、走っていけば何とかなるだろうか。

「君は、誰なんだ。どうして僕を殺そうとするんだ」

その前に聞いておきたいことがある。十兵衛は勇気を出して話しかけた。

「聞いてどうする？ 結局お前の行く末は変わらない」

冷たく突き放され、その上銃口を向けられる。

やっぱり理由を本人から聞くのは無理だ。

「……分かったよ、自分で調べるさ！」

半ばムキになって恐怖を忘れる。そのうちに後ろの図書室に駆け出した。

足元に着弾した衝撃が直に脚へ伝わる。何発も発砲されているが、暗闇では当たらない。

図書室の扉を大きく開き、飛び込んだ。

バタンと閉め切る。一瞬にして訪れる静寂。

「もう追って来ないのかな、……っう……」

再び始まった頭痛にその場で蹲る。

ズキズキして痛い、というよりは意識が遠のいていく。

痛みに耐えられなくなって、ゆっくりと目を閉じた。

風が吹き抜けて目が覚めた。

十兵衛の目の前には質素な墓が建てられている。周りは赤布や彼岸花が彩っていた。

「これはまさか、『ごんぎつね』だとすると兵十のお母さん……」

自分のことではないはずだが、何故か涙があふれてくる。

お母さんは本当に幸せだったのだろうか。

最後に、好物のウナギを食べさせてやりたかった。

あの時ごんがいたずらをしなければ。

「(いや、ごんは悪くない……。ごんは何も知らなかったんだから)」

視界だけがぶれて風景が変わる。

十兵衛は縁側にいて、目の前の軒には鯛や栗、松茸が日ごとに置いてある。

その向こうには物置が見えていて、中に兵十が見えた。

「ごんは今日も来るのかな」

兵十が籠を編み始めた時、ごんが裏の小道からこそこそ入ってくる。

今日はドングリと栗のようだ。笹の葉いっぱいに乗せてやってきた。

ごんはそれを軒に置いて一息、兵十が元気であることを確認する。

「毎日毎日、大変じゃない？」

「ひゃっ！ ……な、なんだ、いつかの時にぶつかった君。こんなところにいたの？」

十兵衛が話しかけると、ごんは飛び上がって後ろに下がった。

しかしごんは十兵衛を覚えてくれていたらしい。すぐに気を取り直して十兵衛の近くに寄ってくる。

「いつまでも……山で採れたものを届けるつもりでいるのかい」

そんな十兵衛の言葉に、ごんは寂しそうに微笑んだ。

「兵十のお母は、おれが網にいたずらしたからウナギを食べられなくて、さぞかし無念だったと思う。自分勝手な償い、かもしれないけど、元気のない兵十は放っておけないんだ」

「お礼を言われなくても？」

「うん」

健気だと思った。

栗やらが乗った笹の葉を軒に置くごんを見て、十兵衛は何も言えなくなる。

何かを言ってはいけない気がした。

「じゃあ、おれは山に帰るよ。そうだ、今度兵十の手伝いをしてやっておくれ」

手を振ってさよならをするごん。十兵衛も小さく手を振り返す。

ごんが見えなくなってから、ふうとため息。

「僕は見ているだけでいいのかな……。この後の展開を教えてあげたら、ごんは」最後に撃たれることはなくなるのだろうか。

『ごんぎつね』というお話は、最後に兵十がごんを勘違いして撃ってしまう。

彼の生死は分からない。そのまま死んだかもしれないし、生き延びたかもしれない。

でも、こんなにも優しいごんに謝る時間もあげられないのは悲しいと思う。

「物語を変えるべき？ それとも、道筋通りに進めるしかない？」

十兵衛には決められない。

こんな人生を変えてしまうような重い決断は出来ない。

「だから同じ間違いを繰り返すんだ、お前は」

ドン。

耳元で学校にいる男の声が聞こえたのと、銃声が聴こえたのは同時。

時間が止まった。いや、十兵衛の思考が止められた。

ミカンが足元に転がってくる。先ほどとは、日が違うようだ。

ごんがばたりと倒れていた。

「おや」

目の前を兵十が走っていく。無音の中、その光景を眺めた。

栗を、果物を、ごんが置いていたものに目を落としている。

背を向けられていたので、表情は分からなかった。

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれていたのは」

兵十が手にしていた火縄銃が落ちる。それはあの男のものと同じものだった。

青い煙が細くのびて消えていく。

「ご、ん」

途端に涙が溢れ、視界がぼやけていく。

とてつもない間違いを犯してしまったのかもしれない。

そこは図書室だった。

入口で座り込んでいて、顔は涙でぐちゃぐちゃである。

何も答えは出なかった。

ただ、異常に虚無感に襲われていた。

「……僕は結局、何をしたら良かったんだ？」

ふらふら立ちあがって、本棚へ向かう。『ごんぎつね』の文庫本を見つけ、手にとって開いた

そこには誰もが知っているお話しか書かれていない。

十兵衛の欲しい答えは載っていない。

「あ……」

手紙が挟まっていた。

えらく古い紙で破いてしまいそうだったが、何とか頁から剥がして読んでみる。

ごんからの手紙だった。

おれのことを気にしてくれてありがとう

でもあれで良かったんだ

お話は続きを変えちゃいけない
おれは兵十に撃たれなきゃいけないかったんだよ
だから、君もそのお話を変えられちゃいけない
大丈夫。君なら出来るよ

読み終わると、役目を果たしたように手紙はボロボロと朽ちて無くなる。

「話は、変えられてはいけない……」

本を棚に戻して入口に向かう。

火縄銃が、そこに立てかけてあった。それを持つと何だか勇気が湧いてくる。

やらなきゃいけない。お話通り、狐を撃って完結させる。

ガラリと扉を開け放ち、廊下にてた。

「ちょっとはマシな顔してんな」

そこに提灯を持った男はいた。

その頭には狐の耳、そして尻尾がある。正真正銘の狐だ。

一瞬躊躇うも、ゆっくり火縄銃を狐の男に向ける。意外そうな顔をした。

「また殺すのか、十兵衛」

「また？」

「兵十と同じように、ごんを撃つのか」

言葉には衝撃があった。

深く十兵衛の脳に浸透していき、やがて恐怖心を煽る。

「でも僕は！」

———刹那が長かった。

ドン、と重い音が校舎に響く。提灯が落ちて青い灯りが淀んだ。

狐を撃った。とうとうトドメを刺した。

撃たれた狐の男はスローモーションで倒れていき、廊下に転がる。

反応はなかった。

「お、わった？」

銃をその場にとり落とした。

ゆらゆら、提灯は灯りを絶やさない。

「……はやく、ここからでなきゃ」

狐のことは考えないことにした。

とにかく家に帰りたい。コガネと会いたい。

日常に戻りたい。

階段を下り、廊下に行く。ふと窓の外を覗くと、そこには人がいて、日常があった。

どっと安心感に包まれる。

正面玄関まで来ると、その安心はさらに裏付けされた。

「コガネ！ 無事だったんだね」

「無事っていうか……十兵衛が忘れ物取りに行って戻ってくるのを待ってただけだぜ？」

扉を半分開けて待っているコガネがいる。

十兵衛の反応に、大げさだなと呟いていた。

「こ、怖かったんだから」

「何一人で教室戻るだけで怖がってんだよ。今時小学生の女子でもないぞ」

冗談を言って笑うコガネ。今までの恐怖をすべて忘れられると思った。

靴に履き替えて扉の前に駆け寄る。

「お待たせ、帰ろうか」

「あ、十兵衛。一つ言い忘れてたことが」

ドン！

夕陽が飛び散った。

「……え？」

腹部が燃えるように熱い。服が真っ赤に染まっている。

飛び散ったのは、十兵衛だった。

正面のコガネが、ショットガンの銃口を十兵衛の腹に押しつけている。

「こ、がね。どう、して」

「まだ気付かねえの。ハッ、いい加減同じ間違いすんのやめろよ」

夕陽で輝く金色の髪に、狐の耳と尻尾。

さっき、撃ったはずの狐。

十兵衛は音もなくその場に崩れ落ちた。ドクドクと液体が流れていく感覚だけが残っている。

「分かるか、この提灯。鬼灯で作ったんだぜ」

光が消えていく中、青い灯りを揺らす提灯だけが見えた。

コガネはそれを弄んでいる、楽しそうに。

「鬼灯の花言葉は『偽り』。全てを正しいと信じ込んだお前の負けだ」

例えばショットガンをずっと火縄銃と思い込んでいたこと。

例えばごんの言葉を鵜呑みにしたこと。

例えばコガネは人間だと思っていたこと。

十兵衛が自分で決め、その責任を負う覚悟をしていれば。あるいはこの『偽り』を見抜くことが出来たかもしれなかった。

「結局分かってなかったよ兵十。お前の子孫は、時を越えても全くお前の間違いを気付けやしない」

懐から狐の尻尾を一本取り出す。これはごんのものなのだが、コガネはこれをお守り代わりに持ち歩いているのだ。

「じいちゃん。俺が絶対、恨み晴らしてやるから」

……コガネは、ごんを死に追いやった兵十の行動が許せなかった。

今も悠々と生きている兵十の子孫が許せなかった。
だから神様に頼んだ。時を超える力を欲し、彼にもう一度同じ場面を見せて異なる決断をすることを願って。

しかし何回繰り返しても兵十の子孫は変わらない。

いつまでも狐に化かされる。そう、いつまでも。

鬼灯が見せる偽りの憤怒の炎を撃てないのだ。

「さよなら十兵衛。俺は次のお前が出す決断を楽しみにしてる」

非日常の校舎にショットガンを置き、鬼灯の提灯だけを片手に玄関の扉を閉めた。

そうしてコガネは提灯を揺らしながら歩き出す。

あの時火縄銃から上がった、青い煙と同じ灯りを手に持って。

この炎を消すことが出来る者を探している。

彼も、この螺旋から抜け出せない憐れな狐なのだ。

運命を変えられない青年と不器用な狐の話。

Everyday with Magic school

魔法学校

そこは魔法使いになる志を持つ者が集う学校。

魔法の専門知識や、魔法の使い方を学ぶ場所である。

「「いってきまーす」」

少女と少年がそろって家を出る。

この二人は近所でも仲がよく、優秀と評判の双子だった。

少女の名はスティル、

少年の名はライトといった。

二人は魔法学校の生徒で、今日も魔法学校に向かう。

いつもと変わらない日常のはずだった……。

「ライト、今日はテストのおかげで早帰りだね～」

「そうだね。そういえば、スティル昨日勉強した？」

「一応ね……」

スティルの顔が少し青くなる。

二人が学校につき、教室に入る。

「「おはよ～」」

二人の目の前には机やイスなどが散乱した変わり果てた姿の教室と困り果てた生徒達の姿が広がっていた。

「なに、これ……」

スティルがつぶやく。

二人に気付いた少女が駆け寄ってくる。

「シエル、これどうなってるの？」

シエルと呼ばれた少女は二人の幼馴染でこの少女も優秀といわれていた。

「わからない、私が来た時にはもう……」

スティルが何かに気づき教室の端の壁のほうに向かう。

「ライトー」

ライトが壁のほうに来た。

「どうしたの？ スティル」

「この壁変じゃない？」

壁にはわずかな亀裂が入っており、魔法の気配が漂っていた。

もちろん、普通の教室の壁には亀裂など無く、魔法の気配もなかった。

ライトが壁をまじまじとみる。

「言われてみれば……」

ライトが壁に手を当て小声で何かをつぶやいた。

その途端、教室が音をたてて崩れた。

音が止むと普通の整頓された教室に戻っていた。

「これ、魔法だよ」

「やっぱり……」

「つまり、誰かが私たちに宣戦布告したつもりかしら」

シエルがニヤリと笑う。

「それは考えすぎだと思うけど」

ライトが少し呆れた顔で言う。

「でも、魔法だってことは誰か犯人がいるってことでしょうか？ それを放っておくのは……」

スティルが何かを考えるように黙り込んだ。

「どうしたの？」

二人が不思議そうにスティルの顔を覗き込む。

しばらく黙り込んだ後、壁に手を当てる。

「何してるの？」

「……」

返事は返ってこない。

すると、急にスティルが教室を飛び出した。

「ちょっと、スティル!？」

シエルとライトがスティルを追い、教室を出る。

しばらく廊下を走り続ける。

廊下には誰もいなかった。

走り続けて数分後、ある部屋の前で立ち止まる。

「わっ!？」 「キャッ!？」

二人がスティルにぶつかり、三人一緒に転ぶ。

「痛い……」

スティルがつぶやく。

「スティルが急に止まるからっ！」

三人が立ち上がる。

「ここ、学校で一番端の空き教室？ でも、どうして？」

ライトの質問にスティルが答える。

「教室にかすかだけど、魔力が残ってたからそれを追って来たらここに着いた」

「つまり、ここに教室に魔法をかけた犯人がいるってこと？」

スティルがうなずく。

「よおし！」

シエルが扉を勢いよく開ける。

シエルに次いでスティルとライトも部屋の中に入る。

その部屋は使われていないせいか、埃ぼかった。

部屋の中には一人の人が立っていたが、逆光のせいで容姿ははっきりとわからなかった。

「あなたが、教室に魔法をかけた犯人ですね」

「だったら？」

声からして女性のような。

「覚悟なさい！」

シエルが勢いよく女性に向かっていく。

<ライト、逆方向から同時に攻撃！>

<了解>

スティルとライトはアイコンタクトを交わし、攻撃を仕掛ける。

三人の手のひらには魔法の炎があった。

「そこまでだ！」

突如背後から男性の声が響く。

三人の攻撃が女性に当たる直前で止まる。

振り返ると、そこにはスティル達の先生が立っていた。

「先生、どうして！？」

「昨日言っただろう？今日はテストをするって」

スティル達に疑問が浮かぶ。

「テストと今日の出来事、どう関係が？」

「つまり、今日の事件をお前たち生徒がどう解決するかがテストの内容だ」

三人の間に沈黙が流れる。

しばらくすると一斉に叫んだ。

「「「はあ——！？」」」

「別に俺は、ペーパーテストとは言わなかったぞ？」

「そうですけど、じゃあ、あの人は？」

ライトが女性を指さす。

「私は、ここの卒業生で、先生に頼まれて今回のテストに協力したのよ」

「……」

言葉が出なかった。

「まあ、何はともあれテストは終了だ。お前ら帰っていいぞー。他の奴等にはテストっていうことを伝えておいたから、もう帰っただろうしな」

「せ、先生！ちなみにこのテストの正解は？」

ライトが尋ねる。

「ああ、正解か。まあ、たいていは教師に言うなりするだろうな」

「じゃあ、私達は不合格ということですか……？」

スティルが恐る恐る尋ねる。

「まあ、お前らは他の生徒より能力も強いから、こういう解決方法も問題ないだろう。まあ、解決方法なんて人それぞれだからな」

そう言い残すと、先生と卒業生の女の人は部屋から出て行った。

三人も教室に戻る。

戻るころにはすでに学校に来てから一時間半が経過していた。

クラスメイト達は先程先生が言った通りすでに帰宅していたらしく、教室には誰もいなかった。

三人は帰路に着く。

「とんだ一日だった……」

「まったくだよ」

しばらくしてシエルと別れる道に着く。

「じゃあ、また明日」

「バイバーイ」

こうしていつもの日常に戻っていく。

私はどうして『 』になんて生まれたのだろうか。

私がまだ若かった頃、世界の事も他の生物との違いも分っていないような頃、娘はここに来た。背丈は見上げるほどで娘はたくさんの本を抱え私のすぐ傍に座り、その左右に本を山積みにして本を読み漁り少しも動こうとしない。座っていてもまだまだ私よりも大きく、私は仰け反るほどに上を向いた。

「どうしてここにいるんだい？」

「なにをしているんだ？そんなにそれはおもしろいのかい？」

いくら尋ねても返事なんてしない。言葉が通じないのだろうか？娘はただパラパラとページをめくった。

やがて日は沈み、娘は本を抱え立ち上がり一言「帰ろう」そう言って傍を離れていった。

初めて娘が来てから何年経ったんだろう。長い時間が過ぎた。春も秋も何度も過ぎた。私の背は伸び、見上げるほどだった娘を越してしまい、今では見下ろしている。ここ数年娘は本当に動かない。何年か前に小さく呻きそれから動かない。それまでは日が落ちるか雨が降るかすれば家へ帰ると言って離れていった。それなのにもう何年も私の傍を離れない。日が落ちても雨が降っても嵐が来ても離れない。それどころかページをめくる事もしない。

「おい、どうしたんだ。帰らなくてもいいのか？おい」

何度たずねても何時も通り返事はなくて、顔を見ようにも昔よりも伸びた背と固い体がそれをさせなかった。私が出来たのは雨で濡れぬように手を傘のようにかざす事や雪が降るときは友人の風と木の葉を集め、凍えぬようにかけてやる程度で安否の確認なんて出来なかった。

「風、お前は娘の顔が見れるだろう。少しでいいから様子を教えておくれ」

風は何も言わず、楽しそうにニコニコ笑ってそこらじゅうを駆け回るだけだった。

また数年が過ぎた。私は自分がどういうモノなのか、娘とはどう違うのかがわかった頃だった。
娘は痩せこけ、肌が薄鼠色になった。髪ははらはらと落ち、とうとうこの間頭が本の上に落ちた。

この時に娘が死んでいると気がついた。

いつからだろうか、叫んだときだろうか？ページを捲らなくなった頃だろうか？風は知っていたのだろうか？

私は風と泣いた。大声でただ泣いた。

私がもし動けたのなら、この大きな土塊に根を張っていなければ、私がもし同じ種で意思疎通が今ほど難しくなければ、娘は助かっていたかもしれないのに。

ああ！ なぜ私はこんなモノに生まれてしまったのだろうか！！

高校生活2年目の夏休み。

私は天狗を『飼う』ことになった。

まずは少し時間を遡る。

「暑い。暑い。暑い暑い暑い暑い暑い！」

「言ってどうにかなるもんじゃないだろ」

「そうも言ってられないぐらい暑いんだ！」

「はいはい、じゃあいつもの場所でも寄りますか」

塾の夏期講習の帰り道。日差しが辛い午後3時。

友達の七夕 河瀬(たなばた かわせ)と私.....日下部 蓮華(くさかべ れんげ)は、日差しから体力を守る為に至極ありふれたドーナツショップに入ることにした。

今になって考えると、私は先ず其処から間違っていたのかもしれない。

話は180°変わってしまうが、ドーナツという物質は、つくづく考えさせられる食べ物だ。

素晴らしく綺麗な、つなぎ目のないフォルム。何処か遠くを見通す為に作られたかのような穴。豊富な味の種類。そして驚くことに、どれもこれも美味しいのだ。

「そんなこと考えながらドーナツ頬張ってる人間、お前だけだと思うけど」

「ふおふふあふふあふおふあふあふえひふふふいんふあふお、ふあふあひふあふおふおふへ」

「ちゃんと飲み込んでから話さない」

もくもぐ、ごくんと漫画のような音を立てて、私は再び河瀬に向き合い話し出す。

「ドーナツはもはや芸術品だと、私は思うね」

「ごめん、それ聞くの10回目だわ」

「じゃあ10回目記念に改めて聞いてくれ」

「断る」

「お前のドーナツ好きは桁が違う」

ドーナツ10個入りの持ち帰りボックスを両手に一つずつぶら下げた私を見て、河瀬は驚きと呆れが混じった溜息をついた。

「只の明日の朝飯と昼飯とおやつですけど」

「よく体壊さないもんだな」

ビタミンもちゃんと取れよ。と河瀬は苦笑混じりに言い、からからと自転車を押して去っていった。

「そうそう、蓮華」

少し離れた場所から河瀬が振り向く。

「何だ」

「お前は変わらないな。何時まで経っても」

そう言った彼女は今度こそ去っていく。

彼女の長い黒髪が生温い風に揺引いた。

何だよ、意味深じゃないか。

まるで何かが起こるみたいだ。

「変わらない……変わらない、ね……」

私は先程河瀬に言われた言葉を反芻する。

あれは皮肉なのか感心なのか。

「いやでもね、変わるのもどうかと思うんですよね。私は」

そう一人呟く。何故か丁寧口調だ。

「いやしかし、そういうことを考えているということは、私は既に変わっているのだろうか？そもそも人が変わるという線引きは何処からなのだろうか？」

もはや哲学の域に達している気がする。正直誰か止めて欲しい。

「先ずこういうものは線引きをして良いものなのか？」

「ぎゃあああああああああああ！！！」

突如、つんざくような悲鳴が私の哲学を止める。

猫のような、鴉のような、甲高い声。

「……ふう、止まった。ありがとう誰かさん」

私はその悲鳴の主に感謝して歩きだそう……としたが、少々心配になった。

何せ尋常ではない声だったから。

「……事件？ひったくりとか交通事故とか？」

しかし此処は見通しが良い一本道だ。事件とは無縁な住宅街の中の。

「いやあああああああ！！ ちょ、ホント、やめてってばあああああああ！！」

また悲鳴だ。2度目ともなるといよいよ不安だ。

「……誰かさん、大丈夫ですか？」

たまらずに私は声をかける。何故かこの通りには私しか居なかったからだ。

お人好し。聞こえないフリもできないで。

「ちょっと今大変なんです！ 鴉に突っかれててもの凄く痛いんですけど……って痛、痛いって！ もう勘弁して！」

「え、あ、はい、わかりました！今から行きますんで！」

どうやら一大事のようなだった。私は声のした方向に駆け出す。

もう哲学なんて、とっくに頭から吹っ飛んでいた。

ギャア、ギャアとゴミ捨て場で叫び回る3羽の鴉を、私は持っていたドーナツの一つ、『メビウスの輪』で追い払った。ここで言うのもなんだが仰々しい名前。

ちぎって投げてやったら即座に去っていった。

流石鴉。食べ物には弱い。

「大丈夫ですか？ もう安心ですよ……って、あれ？」

ゴミ捨て場には誰も居なかった。

逃げる余裕も無かったはずなのに。

「……幻聴だったのかな？」

《いいえ、ありがとうございます》

いつの間にか右肩に一羽の雀が。

声はその雀が発していた。

若い男性のような、はっきりした声で。

「ぎゃあああああああああああ！！！」

今度の悲鳴は、私のもの。

「……最初から説明してくれませんか？」

《言われなくてもするつもりですよ？》

家に帰り、ちゃぶ台に向かい合う1人と1羽。

私の目の前には小さな雀。

自分自身でもわからないこの状況。

「助けなければよかった……」

《何か言いました？》

「いいえ何も」

《とりあえず話を……とその前に、麦茶でも入れてくれませんか？》

「…麦茶飲めるんですか？」

《馬鹿にしないで下さいよ。あ、ちゃんとグラスに入れて下さいね。ペットボトルの蓋とかに入
れちゃ嫌ですよ》

「一気に凶々しくなったな……」

《何か言いました？》

「何も」

私はグラスに1人と1羽分の麦茶を注ぐ。

あの時寄り道なんてしなかったら。

あの時「暑い」なんて言わなかったら。

今頃はのんびりテレビでも見ながら早い晩飯でも食べていただろう。

時刻は午後6時。空はようやくオレンジに変わる頃だ。

「はいどうぞ。麦茶です……よ？」

「ああどうも、ご苦労様です」

其処に居たのは雀ではなく、8歳程の一人の男の子。

ぶかぶかの茶色いコートに黒いズボン。栗色の髪はショートカットだが前髪は長く、目元が隠れて表情はわからない。

そんな男の子が、丁寧に正座をして待っていた。

「突っ込みたいけど突っ込みたくない……」

「あはは、ジレンマですね」

笑えない。全く笑えない。

「あの雀の姿だと色々不便ですから」

「せめて、私と同じぐらいの年齢になるのは……」

「今は無理です。力が無いのでこれで精一杯ですよ」

そう言って男の子はごくりと麦茶を飲む。

私は麦茶に手を付けていない。付ける気にもならないのだ。

「まあまあ、とりあえず自己紹介から始めましょうか。僕は美作(みまさか)。雀天狗です。」

「はいまず質問。雀天狗ってなんですか」

「質問ばかりする人は嫌われますよ。貴方が名前を言ったら答えてあげます」

雀でも少年でも、妙に苛つく口調は変わらない。私は深い溜息をつき、腹を決めた。

「日下部 蓮華。芽吹高校2年生。上京して只今一人暮らし中です」

「へえへえ成る程……蓮華ちゃん、では質問に答えようか」

「何でいきなりタメ口になるんです」

私の突っ込みは無視し、少年…美作さんは改まった口調で言う。

「鴉天狗ってのは知ってるよね？」

「はい。黒い体と嘴を持つごっつい妖怪」

「それね、本当にいるんだよ」

「……………」

突っ込みは無し。突っ込みは無し。

揚げ足を取っていたら話が進まない。

「今までは鴉天狗が全ての妖怪たちを取り仕切っていたんだけど……ちょっと諸事情あって仕切れなくなっちゃって」

「諸事情とは？」

「この夏の暑さで死んじゃって」

……大変だ。一気に空気が重くなった。

思わず私はクーラーを消し、窓を開けて網戸を閉め、扇風機の風を強くした。

「君が気に病む必要はないよ！ 何せ1200年も生きてたから、いつ死んでもおかしくなかったし、水を飲まないのが悪かったんだし」

「全人類を代表して土下座したい……」

ストップ、地球温暖化。本気で。本気と書いてマジで。

テレビよりも何倍も説得力がある。

「そして鴉天狗が死んだのを皮切りにして、妖怪たちが騒ぎ始めたんだ。彼の力で押し黙っていたからね」

「ほうほう」

「それで全ての妖怪たちを大人しくする為に派遣されたのが、鴉天狗の一番弟子である、この雀天狗ってわけさ！」

「でも最初、只の鴉に負けてましたよね」

「言わないでそれは……あの時は雀の姿だったから仕方なかったし大勢だったし……」

彼は俯いて両手で顔を隠す。

あれは相当恥ずかしかつたらしい。

「そういえば美作さん」

私はようやく麦茶に手を付ける。彼に対する警戒心が、少しずつ薄れてきているのが自分でもわかる。

「なんだい？」

「つまり雀天狗は、鴉天狗程ではないけども強大な力を持っている……ってことですよ？ 一番弟子ということは」

「そういうこと」

「何で今、その力が無いんです？」

「奪われちゃったんだ。調子乗ってた奴に」

えっと……雀天狗、本当に強いんだよね？

段々怪しくなってきた。

「管狐って奴さ。鴉天狗の側近で大人しかったんだけど、死んだら手のひらを返すように悪行三昧さ。ああ忌々しい」

「人間でもありますよそういうこと」

この後はひたすら美作さんによる悪口三昧だった。そして私の相づち三昧。

本編にあまり関係無いので、悪いがここは割愛させていただく。

「それでは手を合わせて、いただきます」

「いただきます！」

午後7時。結局いつもの時間に晩飯だ。

人数は一人多いけど。

「晩ご飯はドーナツじゃないんだね」

「流石に栄養が偏りますからね……せめて夜はまともなものを食べようと決めてるんです」

小さなちゃぶ台の上には白飯・ほうれん草の味噌汁・南瓜の煮付け・チンジャオロースがそれぞれ二つずつ。

成り行きで美作さんの分まで作ってしまった。

だって涎垂らしてたんだもん。

チワワのような目をしてたんだもん。

「……とりあえず、美作さんはどうしたいんですか？」

チンジャオロースを頬張りながら、私は美作さんに問う。

「まずは管狐に奪われた力を取り戻す。これじゃあ満足に旋風も起こせやしないよ」

美作さんは味噌汁をかき混ぜて、その中のほうれん草を突っついてた。

「その管狐は何処に」

「……さあ？」

「おいおい」

「だって一、透視能力とか気配察知能力とか一、都合のいい力ばっか取られちゃったんだもん」

「だもんって……」

子供だから許されるけど。

「やっぱりこの姿だと色々制約があるからね。しばらく此処に居させてもらっていいかい？ 妖怪が大人しくなるまで」

「……拒否権は無いんですよね？」

「うん。当たり前」

「……………」

「ごちそうさまー」

こうして、私は天狗を飼うことになった。

美作さんは寝るときは雀になるので、布団については問題無かったと、一応誤解の無いように言っておく。

そうして1週間。

1週間も過ぎてしまった。

1週間の間にもドーナツを買い占めたり、宿題に頭を抱えたり、生ドーナツについて美作さんと白熱した議論を交わしたりと、様々なことがあった。

そうしていたら7日も朝日が昇ってしまっていた。時の流れというものは速い。

……急がなくていいのだろうか？

「美作さん。出かけますから来てください」

「.....あれ？塾は休みじゃなかったっけ？」

「まあまあ、理由は聞かないで下さいよ」

7回目の朝日が昇った日。

私はそう言ってやや強引に美作さんを外に連れ出し、がちゃりと1LDKのマンションの鉄の扉を閉める。

美作さんは訝しむ表情をしながらも、ぱたぱたと羽撃きのような音をたてて私と並んで歩いた。

「.....で？なんだい？ドーナツの安売りでもあるのかい？」

「大体当たりですよ」

これを見て下さい。と、口の端を歪めながら私は言い、中学から愛用しているトートバッグから一枚のチラシを取り出す。

「【みんなのオアシス『ミセスドーナツ』鶴原(つぐみがはら)店オープン！開店セール開催！】.....これ？」

「男女ペアで行くとさらにオマケがつきます」

「普通はこういうのは彼氏とか」

「そんなもの知りません」

「.....」

「知りません」

私の迫力に戦ったのか、美作さんはそれ以上は彼氏について何も言わなかった。

鶴原は私たちが住む鶴鴿台(せきれいだい)の隣町だ。何故かこの近辺は鳥の名前が多い。

「隣町と言っても、ここから10分程度で着きます。.....でも油断は禁物です。早歩きでいきま
すよ」

「走りはしないんだ」

「体力無いんですよ」

「ふーん.....あ！ちょっと待って蓮華ちゃん！『アレ』、使えるかも！」

「『アレ』？」

そう言ったが早いか、美作さんは意気揚々と鼻歌混じりに、何も無い空間を指でなぞる。

何時か見た漫画のように、魔法陣を書き記す感じで。

「☆☆☆▼！」

文字で表せないような言葉を美作さんが発した直後、彼と私の間に激しい突風が巻き起こる。

よかった。今日スカート履いてなくて。

.....いやいや、違う違う。

「美作さん！ 何ですかこれ！」

「よっし！ 成功した！」

あ、駄目だ。全く聞いてない。

「何をしたか聞いてるんですけど……ってうわああああああああああああああああああ！！」

突風は瞬く間に竜巻に変化し、そのまま私と美作さんを飲み込んだ。

……故郷のお父さん……お母さん……私……風になったよ……

「蓮華ちゃん、着いたよー！」

美作さんの声で我に返り、焦点の合わない目で見渡すと、どうやら本当に到着したようだ。ミセスドーナツ鶴原店に。

「竜巻移動の力は奪われてないこと忘れててね！ よかったよかった！ 威力も変わってなかったし！」

良くない。全く以って良くない。

「……あれ？ ご機嫌斜め？」

「斜めどころか曲がりくねりましたよ……あなたのせいで」

竜巻の中なんて生まれて初めて入った。

しかも予期しない形で。

「ごめんごめん。説明してなかったね！ 今のは竜巻移動！ その名の通り、竜巻に乗って移動する事ができる能力さ！」

「へえそうなんですか格好いいですね早くドーナツ買って帰りましょう美作さん」

「うわあすっごい棒読みー」

しかし、そんな怒りもドーナツの前では無力になる。

店のテーブル席に座った私たちは、早速買ったばかりのドーナツを食していた。

本日の購入個数30個。プラスでオマケの5個。

店員が私たちに対し、化け物を見るような目をしていたのが忘れられない。

「ふおんふあひはふふひふあふふえふおふえ、ふひふあふあひふおふおふおつふえふふあふあひふえ。ふあんふあひひふあふあふえふえんふあひふあふあふふあつふえ、ふあふふあひひふあふあひふえふふあ！」

「ストップ！ ……ちゃんと飲み込んでから言ってくれるかい蓮華ちゃん？ 何一つわからないよ」

一週間前にも似たようなことを言われた気がするが、私はドーナツを咀嚼してごくりと飲み込み、再び美作さんに向き合う。

「今回は許しますがね、次はないと思って下さいね。あんな道ばたで変な力使って、恥ずかしいじゃないですか！」

「だからごめんって！ 今度からは人が居ない場所で使うようにするからさ！」

そう言って美作さんは柔らかく微笑む。

.....そういう問題ではない気もするが。

「なーんか、楽しそうじゃないのさ。蓮華」

「あ」

「え？」

声がした方をふと見上げると、そこには河瀬が居た。

彼女が自らこんな所に来るなんて珍しい。

いつもは私に根負けして、引っ張られるようにして来ているのに。

「お前なら絶対此処にいると思ったさ。ちょっと見て欲しいブツがあってね.....怪しいものとかじゃないんだけどさ」

「ほうほう何だ何だまあ座れ」

「あれ？ そういえばこの子は？ 知り合い？」

椅子に座ってコーラを飲み続けている美作さんを、彼女は指で指し示した。

「あっ！えーと、何と言いますか.....」

流石に中学からの仲の河瀬でも、本当のことを言っても信じないだろう。

天狗やら狐やら、ファンタジーじゃあるまいし。

「.....あ！ そうそう従兄弟！ 少しの間だけ面倒見てってくれて叔母さんに頼まれてて...」

私は向かいに座る美作さんに、《巧く話を合わせて下さいね》と言うようにアイコンタクトを送る。

彼は一瞬嫌そうに眉間に皺を寄せたが、すぐに河瀬に愛想笑いをして頷いた。

「やっぱ小さい子は可愛いな。癒される」

「可愛いのは今ぐらいまでだよ。.....で、見て欲しいものって？」

「コレさ」

やや神妙な顔をして、河瀬はジーンズのポケットから小さな箱を取り出す。

.....マッチ箱だ。ライターの普及により、その姿を近年あまり見かけなくなっているマッチ箱

。

表面はやや掠れてはいるが、白いイタチの絵がプリントされているのがわかる。

「.....お前って、骨董品コレクターだったっけ？」

「違う」

「確かに売ったらいい値段はしそうだが」

「違うってば蓮華」

某鑑定団に依頼する気はないようだ。

「爺ちゃんの物置漁ってたら見つけたんだけど.....やたら変なことが起きるんだよ」

「例えば？」

「庭の草むしり頼まれたことがあって、面倒くさいから無視してたんだけど……2時間ぐらいして庭覗いたら、根っこから雑草が全部抜かれてんの」

「誰かがやったんじゃない？」

「家には私以外誰も居なかったぞ？」

「……………」

「……………」

え、何それ？ ホラー？

「まあそれは置いといてだな、もっと変なことがあるんだが」

「置いとくのかよ」

「まずはこの中に、何も入っていないことを確認してくれないか？」

数少ない私のツッコミを華麗にスルーし、河瀬は空っぽのマッチ箱を手で覆い、視線をそれに集中させる。

「……………」

「……………」

「……………」

この間三人共無言。

気づけば客は私たちだけになっていた。

そんな中途半端で今回はこれにて。

次回を待つべし。いえい。

千里青雲高校文芸部 部誌 それが俺らの青春さ vol.7

縦書き作品



褪せた鉛筆の文字
伝えたかった思いは
今いずこ

過去と今と未来とを
さまよい続けて
やっと見つけた二人の記憶

それでも気持ちは届かない
何が一体邪魔をする？

3年 碧星

一通の手紙が彼の家に届いた。差出人は書いていなかった。宛名の文字を見ても、その筆跡に心当たりは無い。消印を見ても何処か分からない。知らない地名、というのではなくかすれて読めない。

中は便箋が一枚。そこに書かれた文字に目を走らせる。そこに差出人の名前が書いていると思ったから。

だが、彼が感謝されているような内容が一文、書いているだけだった。

彼には、そんな事をした心当たりは無かった。

残しておく物でもなさそうだからゴミ箱に捨てても良かったけれど、彼の気持ちの中にあった錨のようなものがそれをやめさせた。結局、その手紙は本棚の隅っこに押し込んだ。

ある時、気がついたら真っ暗な空間で彼は立っていた。どこでこんな場所に足を踏み入れてしまったのかと考えた。

「ねえ、覚えている？」

どこからかそう聞こえた。声の主は分からない。

そして、辺りは真っ白になり、何処からともなく文字が横から流れてきた。

目で追った。そして、その文字に触れようと手を伸ばしたけれど届かなかった。歩いて寄ろうとしても、近づく気はしない。だが、彼は前に進み続けた。だんだん早足になりながら。そうこうしているうちに文字は消えてしまった。

そこで目が覚めた。

何かに引き寄せられるように、寝間着のまま真っ先に本棚の隅を探す。色んな書類や手紙が煩雑に押し込まれていた。その中から、幾つかの皺がついてしまっていた差出人の名前が無い手紙を見つけた。中の便箋を取り出して目を通した。

夢に出てきた文章と手紙の文章は全く同じだった。せめて、あの夢に人が出ていれば、と思った。差出人が誰か分かったかもしれない。単に、手紙を読み込んだからこんな夢を見てしまっただけかもしれないが。

電話が鳴った。はっとして受話器を見る。画面に表示された番号はどこかで見覚えがあった。

「もしもし？」彼は受話器を耳にあてる。

「もしもし、政重だけど」

小学校の頃からの友達だった。一体、何年ぶりに聴く声だろう？

「ああ。久しぶり。なんか用か？」

「いや、あのさ、俺達が住んでた村、もう無いらしいってことを聞いたから」

「知ってる。前、行ったときには既に廃村だった」

「どうして行ったんだ？」

その時、彼の脳裏には稲妻が落ちたかのように記憶が閃いて、思い出が展開された。

まるで、幻のような、夢のような。

彼は黙っていた。

「どうした？ 聞こえてるか？」

あの頃は、ある夢を繰り返して見ていた。

雪の日の夢を。

窓を見た。

雪だった。

今季の初雪だった。

この前、行った時も雪が積もっていた。

もう、今年も十二月になるんだな、とカレンダーを彼は見た。

日付を見る。そして苦笑いをした。

「ずっと前の明日の事、覚えているか？」

二人は黙った。辛い沈黙だった。

ひとときも忘れないようにしていたつもりだった。

でも、忘れていた。

なんと情けないことだろう。

耳を塞ぎたくなる急ブレーキの音。

目を瞑りたくなるトンネルの壁の血。

生々しい嫌な思い出が瞬く間に蘇った。

「俺は今朝まで忘れていたよ」

「どうして思い出した？」

「分からん」

オーロラが出てくるような沈黙が再び。

「こっちは今、初雪が降ってる」

「こっちも降ってきた」

「あの日も雪だった」

十センチぐらい雪が積もっていたか、あの日は。

「ああ」

「明日は暇？」彼は誘ってみることにした。

「え？ 休日だから一応」

「行かない？」

「本気か？」

「当然」

「別に構わないが」

「分かった。明日の朝八時にお前の家の前で」

「了解。また明日な」

電話が切れた。電子的な音の連続が続く。彼はしばらく受話器を耳にあてたまま立っていた。

自分も、政重も、変わったかなと初めて思った。



彼が過去に訪れたという廃村はほとんどの建物が朽ち果て、原型をとどめていない。当時、このあたりで最もハイカラで頑丈と言われた駅も数えきれないほどの風雨に曝される中で自然と同化を目指していた。その駅に隣接している車庫も、彼が前に訪れたときにはまだ原型をとどめ、中には車輛があったが今では崩れてしまっている。中にあった車輛はどうなっているのだろうか？

直ぐ隣の町も、数年前までは人がいたが、最近は全員が村を出て行ってしまった。彼が前、訪れたときに使った使ったバスも無くなっている。

その廃駅の待合室。廃虚らしい異様な雰囲気にもまれていた。そこに一人の少女がうつむいて座っていた。錆びつき固くなったドアを開けたためだろうか、手は少し赤くなり錆がついている。

彼女は列車が来ないことを知っているのだろうか。でも、彼女一人しかいないからそんな心配をする人もいない。

（どうか。

わたしの名前を。

どうか。

呼んで、ください……）そう思いながら彼女はまどろみ始めた。

まるで緩やかな坂を自転車で降りていくように眠りに落ちる。

彼女の顔には、一筋、涙の跡が残っていた。

ふと、目が覚めた時に待合室の外の僅かな異変に気づいた。

（外が仄かに明るい気がする）

蛍かと思った。でも、季節が違いすぎる。今は冬。また何かの動物ということも考えたが、他に光る動物というものが何も思い浮かばなかった。

顔を上げて、錆びついたドアの方を見る。

声が聞こえた。男の声のようだ。誰の声かは分からないが、二人はいる。

ひとつの可能性が彼女の頭の中をよぎり、期待した。自分から出ていくことも考えたが、彼らが気づいてくれるのを信じる事にした。

二人は何時間も歩いてここへ辿り着いた。朝出発したのに着いた時には既に夕方だった。トンネルの内壁を彩っていた赤いものはかなり薄くなっていたが、まだ残っていた。こんなにも長いこと残るものだなと彼は思った。それと同時に、前来た時にここで見たのは幻ではなかったと確信した。

「ここが本当にあの駅なのか？」

「ああ。もうだいぶ原型を失ってるけど」

二人は廃駅へと入った。おぼろげな記憶を頼りに構内を歩く。

「あ、待合室」

「待合室？」

「ああ。待合室がある。これだけ経っても意外と何処に何があるって覚えているものだな」そう言って政重は錆びついたドアに触れた。「お前が前来たときはどんな感じだった？」

「駅舎には入っていない。車庫には入ったが」

「汽車はあったのか？」

「あった」

「どうだった？」

「その中で一晩暮らせた」

「いいな。今じゃ車庫も潰れてるもんな」

完全に崩壊してしまっている車庫の方を見た。彼が前、訪れたときに夜を明かした汽車は車庫の瓦礫に埋まっていた。

「ところで、そのドア開く？ 錆びているから開かないんじゃない？」

「いや、普通に開く」政重はドアを開けた。「思ったよりずっと軽い」

政重の後ろに彼も続く。

一人の少女がベンチに座っていた。

二人は凍りついた。

少女は二人に気づき、顔を上げた。

「久しぶり」微笑んで少女が言った。

彼はその声を聴いて少し安心したようだった。

「来たよ。政重も一緒」彼は答えた。「久しぶり」

涙が、少女の頬を伝った。

「誰？」政重は目だけを彼に向けて言った。

「美知代」

政重は少女を見た。

「あまり変わってないな。ある意味、羨ま……」政重はそう呟いたが、途中で言葉を切った。

「おっと、すまない」

「いいよ」彼女は立ち上がった。

見た目は幼い。でも、会話をしていると年齢の差は感じない。

沈黙。二人は空いているベンチに座った。

「他の奴らは？」彼は訊く。

彼女は首を横に振った。

「残念だ」

政重は大きな欠伸をした。まどろみ始めた。

「ああ、なんか不思議な感じがする。すっきりしたような空っぽのような」

「おい起きろ、政重」

「少し寝さしてくれ」

「あ、そう」

毅は美知代を見つめた。少女は彼に手を伸ばした。彼が何処かでなくしてしまったキーホルダを持っていた。昔、この場所で手に入れたものだった。それを彼は受け取ってじっと見つめる。

彼の思考ははまっすぐ二十年前のところを目指した。色々な声が脳裏に響いた。

――今度はいつ来る？

これは友達の声。それが、きっと最後の言葉になった。

――しっかりしろ！ 声が聞こえるか！ 聞こえるなら、どこでもいいから動かせ！

知らないおじさんの声。事故に遭った時に呼びかけてもらった言葉。

――グッド・ラック。

これを言ってくれたのも、確かあのおじさんだった気がする。

（おじさん、今も元気ですか？）彼は思った。

キーホルダが急に動いた気がした。おじさんが答えてくれた気がした。そうだ、このキーホルダ。あの人から貰ったんだ――。

綺麗に思い出した。もう、十分かもしれない。美知代にももう一度会えたい。

彼は大切そうに鞆のポケットにキーホルダを入れた。

「ねえ、こっち！」彼女の声が突然した。

その声はとても遠くから聞こえた気がした。

ぼうっとしていた二人は、少し反応が遅れて立ち上がり彼女を追いかける。足元の落ち葉の下には何か硬いものがあった。時々それにつまずき転びそうになった。

彼女は錆びついた車止めの上に立つ。その後ろには稜線に沈んでいく太陽。とても赤かった。

彼はその風景を見て、数年前によく見ていた夢を思い出した。どこかの駅で彼と少女が話をしていた、彼の質問に答えないまま少女はやってきた列車に乗ってしまう。そんな夢。

その夢での会話の一部を思い浮かべていた。

——今でも待っている？

何を？

——何でもいい。

そりゃあ、誰だって何かを待っているんじゃないか？

——じゃあ、あそこまで来てくれる？

あそこって何処だよ。

——星の似合う場所。

この夢は全く見なくなった。前、ここに来てからの事だったと思う。

ここが、星の似合う場所だったのだろう。

「本当にありがとう、来てくれて」

「美知代がこれを？」彼はポケットから持ってきていた手紙を取り出した。

彼女は静かに涙を流した。そして頷いた。

「これで、おしまい」そう言って大きく手を広げた。「もう、きっと……」

「きっと？」

彼女は答えなかった。彼女は空を仰いだ。

太陽は既に沈んでいる。空に残った赤い色が綺麗だったけれど、その色もすぐに夜の空に飲み込まれてしまった。

まさに今、夜になった。

星空がフェードインしてきたみたいに浮かび上がる。そのなかでもひととき綺麗だったのは、尾を引いている蒼い星だった。前にここを訪れた時も、その星を見た。

「彗星か」政重が言った。

何処からか汽笛の音が聞こえた。

ずっとずっと前のこと。汽車が廃止される日、二人は一緒にそれに乗った。その後、お墓参りに行った。自分たちの友達の……。

政重だけが振り返った。すぐ後ろまで汽車が迫っていた。

ブレーキ音が響いて停まる。ドアが開いて一人の少年が降りてきた。

「なあ毅、こいつ——」政重は彼に言う。

「ああ、間違いない。小さい時の自分だ」

胸ポケットに入れていたボールペンで手紙に一言、彼は書き込んだ。そして少年に渡す。

少年はそれを空に放り投げた。綺麗な放物線を描いて彼女の方向へ飛んでいく。少年は汽車に戻った。

彼女を見る。青白い光に包まれていた。

手紙は彗星をバックに空中で静止した後、白い光の粒となって四方八方に散り、あたりに降り

注ぐ。

雪みたいだった。

「さよなら」美知代の声。

命が煌く、というフレーズが思い浮かんだ。

ヘッドライトが急に明るくなって、汽笛が鳴り響く。エンジン音も轟き始めた。

「幻か、本物か？」政重は汽車に触れようとして彼に訊いた。

彼は答えない。突然走って、汽車の横へ。そこから車内を見た。政重も彼を追いかけた。

「あ、ああ……」彼はそこに立っていた。

そこには懐かしい顔ぶれがいた。政重も言葉が出なかった。

「良かったね……」美知代の声。

彼は涙を流していた。

汽車は動き出し、まっすぐ美知代の方へ。

「美知代！」二人は叫んだ。

彼女の姿は、汽車の影に隠れたが青白い光でそこにいることが分かった。でも、光は汽車とぶつかって、光の粒となりさっきの手紙のように、飛び散り、地面へ落ちる。

汽車は何事もなかったかのように、星夜の空へと消えていく。

銀河鉄道のような光景だった。

「雪だ」政重が言った。

本物の雪だった。星明かりに照らされて光っているのだ。

二人は手を広げて、一粒、雪を乗せた。その雪はすぐに溶けてしまう。儂いものだ。

彼はもう一度空を見た。流れ星が幾つか流れた。

「綺麗だな」

「ああ」

その日は例の待合室で泊まった。それだけの準備はしてきていた。

まだ太陽は昇っていない。でも彼はもう目が覚めた。妙に冴えていたが、少々気持ちが悪かった。

寒かったからか？ あるいは、ともうひとつの理由が思い浮かぶ。それを確かめる為に、左手をポケットに突っ込む。

紙の感触。便箋が入っていた。軽い絶望が彼を襲う。

「夢だったか……」

幻であっても、夢であってほしくなかったのに。

もう、どこまでが現実か自信が持てない。

すぐ横で政重が寝ている。時刻はまだ朝の四時だった。

一連の出来事、もしくは夢のことを考えていた。

自分があの手紙に書いた内容。

もしかして、自分は。

そして、彼女も。

お互いに――。

ああ。

一体、あれからどれだけの季節が巡ったのだろうか？

気づくのが遅かった。

でも、どうしようもない。

だけど。

これで。

終わり。

だから。

きっと。

夢は。

もう見ない。

忘れないようにするだけ。

大切なものだから鍵を掛けてしまおう。

すぐ横で政重が少し動いた。

「何だ毅、起きていたのか」横になったままで政重が言う。

「おはよう」

「今何時だ？」

「四時過ぎ」

「早いな。一一六時ぐらいにここを出ないか？」

「そうしよう」

黙って政重は身体を起こした。

「なあ毅、ここに前来た時に、美知代に逢ったか？」

「わからない」

「そうか、やっぱり夢か……。そうだ。お前、何か手紙みたいなものを持っているか？」

何も言わずにポケットから手紙を取り出した。

「これはここに置いていくよ」

鞆のポケットからボールペンを取り出してその手紙の空白に言葉を記した。

「これで、OK」

彼はボールペンを仕舞う。その時に、美知代からもらったキーホルダを入れていた事に気がついた。

「なあ、これ」キーホルダを鞆から取り出す。「鞆に入っていた」

「宝物だな」

「ああ」

そして目を合わせて微笑む。

これで、もうここに用事はない。これは確信を持って言える。

思い残すことは、もう無いだろう。

一一さよなら、ありがとう、美知代。

もしかしたら、僕は一一。

それが俺らの青春さ vol.7

<http://p.booklog.jp/book/33321>

著者：千里青雲文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/passer/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33321>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33321>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.